

隨身せられしは、深き思食ありての事なるを、定吉深くも察せず彼是獻言せしに、利長卿の氣色よからず。遂に病氣保養を申立て、京都へ赴き、名を無山と稱し、隱遁者と成りて京都にて卒せり。故に其の遺跡も、僅なる家祿を賜はり、子孫幽かなる事とは成りたり。奥村河内守榮明が妻は定吉の娘にて、一女子出生せしかど、離別して、其の由縁不知と奥村譜に載せたるも、定吉のさる不首尾の事共にて退去せしより起りて、離別せしものなるべしといへり。按ずるに、村井長明の象賢紀略に、關原陣の時上方より利長様へ、秀頼公の御書を石田治部少など下し候。則ち金澤御書院にて、高島石見・青山佐渡・太田但馬・山崎長門・横山大膳・篠原出羽など、肥前様御前にて御相談の時、高島石州被申分、利長卿御意色々物語有之。其時石見一言に利長卿御機嫌あしく、御をばむこに候へども跡もしかと御立てなく候。是は芳春院様を御すて候て、上方と一所に御成候へと被申候事。と載せたる趣旨にて知られけり。今高島氏の傳説にも、利長卿の母堂芳春院殿、利家卿薨逝後、徳川家との物議起りけるに依つて、關東へ人質として下向し給

ふ。後大阪より利長卿に、秀頼公の助力有之之度旨申来るに付、利長卿國老の人々へ協議し給ふ時、定吉指出で、利家卿御遺言の次第も有之儀、御母堂ながら芳春院殿を捨て、なりとも、秀頼公の御加勢を可被成儀歟と、外宿老の人々にも斟酌なく獻言せし處、利長公、親を捨てよとの申分甚だ過言なりと、殊の外立腹し給ひ、夫れより後萬事不首尾に付、病氣を申立て金澤を退去し、上方へ参り遁世の身分と成り、遂に京都にて果てたりといひ傳へたり。

○南 町

此の町は尾山八町の一町にて、佐久間盛政在城の頃に置きたる町名なり。但し其の時代には、城の南方金谷出丸の地にあり。故に南町と稱すと三州志等にいへり。加府事迹實錄にも、昔は南町は城際の南にあり。金屋町は金谷門の内に入り。城際に町屋を建置不可然とて、悉く追ひ退けられ、各今の所へ退去す。とあり。按ずるに、慶長の金澤城圖を見るに、玉泉院丸の下、金谷出丸内惣構堀の内に三條の町ありて、其の中央の一條をば南町と記載す。三壺記に、寛永十二年五月九日河原町の後より出火し、南町・石浦町・

堤町等悉く焼失す。此の時町中をば惣構の外へ屋敷替へ命ぜられ、町割調ふ。とあり。平野屋半助由緒帳に、寛永十三年町割之刻、御城へ被爲召、町割之御繪圖を以て、勝手宜處可奉願旨被仰出、只今之居屋敷奉願處、同年拜領被仰付。など見たり。されば南町を今の地へ送り出したるは、寛永十三年の事にて、火災の翌年なる事知られけり。十二冊定書に載せたる金澤通町筋町割附に、三町貳拾間南町とあり。是は今の地へ移轉せし後の町割間數附也。

○金屋忠左衛門傳話

三壺記に云ふ。寛永八年四月十四日、犀川橋爪法船寺の門前より出火し、河原町一面に火と成り、南風つよく、次第に大火と成り、御城本丸悉く焼亡す。此の由江戸へ聞えければ、爲上使徳山五兵衛・桑山左衛門に、御夜着・蒲團・御小袖・御帷子爲持被遣、五月十一日に金澤到着也。今度の火事に南町の片側は焼けされば、かねや忠左衛門及び近所二・三軒の町屋上使宿に被仰付、賄方被命、通ひの子小姓柳田長三郎・佐藤伊織・安彦兵部、其の外五・三人替々に参りけり。兩使頓て御暇申上げ、拜領物賜はり歸られけり。

按ずるに、此の時の南町は、いまだ城南金谷出丸の地にありし頃也。金屋忠左衛門は金屋忠兵衛の祖なりけん。御門前町に居住せし染工金屋忠兵衛の家傳に、忠兵衛は後藤用助の子孫にて、用助は昔金屋町金谷の地にありし頃銀座・吹座を勤め居たりといへり。後藤用助は、金屋丈仁の書記に、秀吉公の時、大納言様後藤家之者登人拜領被成度旨御訴訟に付、後藤用助加州へ罷下る。矢田主計と相司に被仰付、銀座相勤む。とありて、寛永十四年閏三月の書簡に、金屋用助とあるものなり。

○柴屋某傳話

三壺記に云ふ。寛永十八年の秋の末、津田勘兵衛は切死丹の宗徒たるべき事紛なしと、大手の辻に高札を立てたり。光高君の御耳に立ち、利常卿へ飛脚を以て被仰上げる處、先づ勘兵衛江戸へ罷越し、申分け仕るやうにとの事ゆゑ、俄に江戸へ参りけり云々。或説に、南町の上の端に柴屋といふ町人あり。日本へ多葉粉はやり來る時、此の柴屋といふもの初て金澤にて賣弘め、刻多葉粉など初て仕出しけり。故に躍り歌の留めにも、柴屋たばこやらんしうや。